

2007. 6月号

アスリートのための キャリア・トランジション勉強会

Newsletter No. 23

2007年6月21日

第23回

アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

【目次】

1. 「トランジションの生き方ーアスリートとして、人間としてー」 ゲスト：及川 晋平氏 _____	1
2. 第23回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果 _____	21
2007年6月21日 勉強会参加者人数 _____	22
3. 次回勉強会スケジュール _____	23

第23回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

第 23 回アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

日時 平成 19 年 6 月 21 日(木) 18:30~20:00

場所 エスポーツミズノ 8F

■テーマ■

「トランジションの生き方ーアスリートとして、人間としてー」

■ゲスト■

及川 晋平(おいかわ いんぺい)氏

パラリンピック車いすバスケットボール元日本代表

(及川) 僕は、車いすバスケットをするときだけ車いすに乗っているんですね。あとは義足で。

(田中) 本当に？

(及川) はい、一切乗りません。

(田中) 本当に？

(及川) はい、一切乗りません。

(田中) そうですか。初めてお目にかかったときに、確かシドニーオリンピックの後で、2000 年の最後の方か 2001 年だったと思うんですけど、義足の着け方を拝見させていただいたときに、すごくうまく着いているんですね。足のかかところが逆に着いているんだっけ、ひざのところで。

(及川) そうです。手術をして。井上先生が描いている『リアル』という車いすのバスケット物があるんですけども、そこに主人公が同じような手術をしています。だからそれを見れば分かると思います。

(田中) ありがとうございます。『リアル』ではね、いろいろ、それこそ監修じゃないですけども、作者の井上さんが及川さんに長くインタビューをされていてですね。

(及川) はい。

(田中) さて、及川さん、でも、ひざは生れてからではありませんでした。

(及川) そうですね。

(田中) 小さいころのお話と、それからバスケットボールをそもそも、ご病気をなさる前からずっとしていたと伺っていますので、その辺を少し教えていただけますか。

(及川) 僕は小学校、中学校と普通の子供でしたね。朝から晩まで遊んで、中学校の間は全部部活になってしまったんですけれども、朝練があつて、いろいろ予選があるとかいうような、もうバスケット尽くしで、勉強もろくにせず。高校受験はもうバスケットの強いところだけ選んで、上から2番目まで落ちて、最後にぎりぎりで引っ掛かって高校に入ったんですけれども、もうバスケットだけしかやらないような子供でしたね。だから、まったく皆さんと同じような思いだったりとか、方向だったりとかしていたと思います。

(田中) 何かそのころ、小さいころだとか中学生のときとか、夢はあつたんですか。

(及川) 夢は、バスケットがなぜかすごく大好きだったので、バスケットをしながら生きていけばいいなと思っていたことですね。

(田中) 高校生になって、練習中にひざが痛くなります。高校何年生のときですか。

(及川) 高校1年生の冬だったかな。

(田中) 練習中に。

(及川) 練習中ですね。

(田中) その辺のお話を教えていただけますか。結局、痛いのに結構お医者さんに行かないんですよね。

(及川) 入院するのが1月21日だったんですけれども、12月ぐらいに痛くなったときがあつて。僕の高校はすごくスポーツが厳しい高校で、それこそ休んだら怒られるし、シュートを外せばなぐられるし、みたいな時代だったので、痛くて足を引きずっていることすらできない。だから、もう我慢してバスケットをしているというような状況で。たまたまお正月休みがあつたので、そこで少しよくなったんですけれども、1月4日ぐらいが練習始めて、行ったら、もうジャンプもできない、痛いし。でも、これ痛くてと言ったら、どこが痛いんだ、足がっていったら足をけられるみたいな、とにかくそんなような高校でして。そういうことも言えずに、もうぎりぎりまで我慢して、町医者に行ったら、あ、これは大変かもしれないな、みたいなことになった。

(田中) 最初は、大変かもしれないなと。

(及川) 大きな病気なんかしたことがないので。普通高校生でなるのはねんざか筋肉痛かぐらいですね。あと肉離れという高級な…。肉離れなんかになったら、俺結構やっているなみたいな。

(田中) わかります。私、自分も高校 1 年のときに疲労骨折になってすごうれしかったです。疲労骨折ってかっこいいですね。

(重野) 医者に褒められました、そんなよく練習をやるねと。

(田中) 一番だめだよ、あれはね。でも高級なけがだと思っていた。

(及川) たまたま僕は運がよかったです。医者の方がそれらしきものじゃないのか、みたいなことに気付いて、その場で紹介状を出してくれたんですね。

(田中) 大きな病院に。

(及川) 大きな病院ですね。僕は、その紹介された病院に行くまでは今度はもう足がどんどん痛くなって、夜もセデスを 4 時間に 1 回ぐらい飲むような感じで。尋常じゃないことも分からないんですよ、高校生で。バスケットをやらなきゃ意味がないから。母親もちょっと尋常じゃないからすぐ電話しなさいとか言って、病院に電話したらもうすぐ大学病院に行けと言うので、大学病院に行ったら、院長さんがいなくて、代わりに来た先生がたまたまがんセンターの研修を終えてきた先生で、すごくその病気のことを知っていらっやして。あ、これは間違いないとって、今度は千葉県のがんセンターに。診たらそうだとということで、そのまま入院したんです。もう 1 年も家にも帰れない。

(田中) そうですよ、確か 1 回千葉に行って、及川さん、すぐ戻れるぐらいのつもりで、1 年とか 2 年というのは入院しちゃうんですか。

(及川) そうですね。もう歩いちゃだめということで車いすに乗せられて、そのまま入院と。だからもう朝は肉離れの重いのかなみたいな。何だろうと思いついて、病院を 2 件ぐらいまわって、で、がんセンターでそのまま入院。

(重野) そのことで気付いていらしたんですか。

(及川) いや、気付いてなかったですね。

(田中) がんだとは知らなかったんですか。

(及川) その当時はまだ言われなような時代でしたから、子供にがんがあるとかなんて言わないし。ちょっと炎症が起きているねとか、何とか腫瘍じゃないけど。腫瘍なんていう言葉も分からないから、治療、取りあえず入院しろと言って。

(田中) 途中からお越しいただいた皆様に、ここまでのあらすじを申し上げます。今日の及川さんの話は、一番最初から聞いていないと絶対だめだと思うので、もう 1 回言います。簡単に説明しま

す。元気な子供でした。バスケットをやっていました、ずっと。普通のお子さんだったそうで、及川さんはおっしゃっています。高校1年のときにけがをします。痛みが出てきます。痛みが出てきても全然気にもしていなかったんだけど、本当に痛くなったので病院へ行ったら、結局はこれががんだったんだけど、がんとは知らずに入院が始まります、千葉でね。

(及川) そうです。

(田中) すごく変なことを1つ聞いていいですか。ちょっと今、そこから飛ぶんですけど、どうしても今の瞬間に聞きたいので、お聞きするのですが。及川さん、こういう話をなさるときに、いろいろなところでたぶん何百回、何万回とこの話をされたと思うんですけど。でも、変な言い方ですけど、自分ごとで話していらっやらないのが今、横で見えていて不思議でしょうがないんです。自分に酔っていないし、わざと言っていないし、でもわざと拒否しながらも話していないし。あまりにその過去の自分の経験とのスタンスがすごくバランスがあって、これは何でなのかなと。ご自分で分かっているのか、それとも。どうしても1回聞きたくて。

(及川) いや、僕は、振り返ることがすごく好きなのかな。大切にしたいんですよ。もう今、ここにいる自分がこういうことだということと、結構すごくどんどん忘れていくので、あのときどうしてこうだったのかなみたいなことを考えたり。こういうことをきっかけに自分のことを振り返ったりとかして、結構不思議だなと思うので、そういう考えることは好きですね。だから、何かすごく、あのときああいうふうにしてたから今いるんだとか、たまに気付いたりとか。

(田中) 重野さん、感じるでしょう、今日。いつもゲストにいらっやる方って……

(重野) 距離感が。

(田中) あるでしょう。

(重野) ご自身の中で、保たれているなという感じが、すごく今日しているんです。

(田中) わざと遠くにしてもいないし、わざと近づけてもいないから。

(重野) ものすごいスピードで人生がうわつとめくられたと、ある意味、そんな感じがちょっと最初にはしています。

(田中) 私、めくられたというよりか、何かすごく新しいページに塗り替えているんだなというイメージがあったので、何で過去をこうやって塗り替えているのかな。

話をえます。入院しました。1年、2年たつうちに絶対ちょっとおかしいなと思ったと思うんですけど、どの辺がおかしいなと思ったのでしょうか。

(及川) おかしいなと思ったのは、この病気を最終的にはあんまりおかしいとは思わなかったと

というのが、自分の中で今でもすごく思っていることなんですけど。結構、先生とかは、僕がどういう病気だということを僕が知らなきゃいけない、みたいなことで「及川、お前、すぐ切断するぞ」みたいなことをもう毎週 1 回ぐらい言われていたんです。でも僕は「またまた、先生」、みたいな。僕、全然がんに対する親近感がなかったというか、僕がそうなんだということを受け止めなかったというか。ある意味、いい面で。

でも、車いすに乗っていると筋肉も全部落ちちゃうわけですね。あるとき、鏡にたまたま映った自分の姿を見て、これはおかしいなと思ったんです。だいたい44キロぐらいになってしまうんです。58キロぐらいあったのに。

(重野) 13~14キロぐらい。

(及川) 7カ月ぐらいで落ちたんですけど。そのときに、あ、これ、死にそうだよというのが僕の見え方。死にそうだ、俺。このままいったらたぶん死んでもおかしくないかもなと思って。ちょっと真剣に考えようという。

(田中) そのときにどうしました。何かした？ それとも逆にしなかったわけ？

(及川) 僕、しましたね。

(田中) 鏡を見た後。

(及川) 鏡を見た後に、くだらない話なんですけれども、とにかくすごく細くて、体が。筋肉も全部なくなっちゃって。これは太らなきゃだめだなと思ったんです。僕、もともとスナック菓子とかジュースが大好きで、母親にねだっていました。ここぞとばかりに、毎日1個ジュースを飲んでお菓子を食べてみたいな。好きなものをとにかく食べて太ろうという、いい顔をしていれば死なねえだろうなと思ったんです。

(田中) それは高校時代、だから結局もう高校時代は入院なさっていたんだよね。

(及川) そうですね。

(田中) 一度退院なさる。

(及川) 1年間抗がん剤の治療があって、少し退院するんです。そして復学するんです。

(田中) ですね。それが高校。

(及川) 高校1年生でそこから1年抗がん剤の治療をして、それで復学してダブって2年からやると。ダブって2年に入って、半年ぐらいして今度は肺に再発をしまして。入院することになるんです。

(田中) それが 17 歳？

(及川) 17 歳ですね。

(田中) それがもう 1 回目の次の入院ですね。これ、長いですね。

(及川) これは半年ちょっとぐらいですね。

(田中) これは半年なんだ。

(及川) また、今度は出て半年ぐらいして、また再発して入院するんです。もうだいたいあしかけ 5 年ぐらい入院しているんです。

(田中) 全部でね。入院している最中にひざを切断することになったのはいつなんですか。

(及川) 最初はやっぱり切断なんて言われても、おいおいということで。足を残しますか切断しますかということ言われたんですけど、それにはどう考えても切断しませんよと。人工の関節を入れて、金属の関節を入れて 1 年それでやり過ぎて、復学して、再発をするんですけども。再発をしたときに、「うん」と。僕がなった病気のころの 10 年前は、7 割方死ぬぞといわれていた病気で。

(田中) ひざのがんで。

(及川) ひざのがん、小児がんで。再発したらもう治らないでしょうというような雰囲気が漂っているわけ。そのときに、そろそろ自分で覚悟を決めなきゃいけないのかなみたいところで、とにかく足に金属が入っていることがすごく嫌だった、痛くて。このまま生きていくことも嫌だった。痛くて、毎日痛かった。じゃあ、もう切断してしまえと。身軽になってちょっと思い切って勝負をしてみようかという意味で。肺が再発してリーチが痛くて。やはりその足切断してしまえと。

別に、今、悪いわけじゃないんですよ。再発したときに手術で切除してしまえば、そこから一応健康になって。そこからまた再発しなければいいわけですから。そのときに自分なりのアクションをしたかったという。

(田中) でも、肺に転移しちゃったのはその後。

(及川) いや、肺に転移して、足を切断して、半年ぐらい治療をして、また半年出て行って、また肺に転移してという。それでまた退院。3 回ぐらい転移していますね。

(田中) これ、いつが終わりというんじゃないかなったんですね。

(及川) なかったですね。

(田中) 結局ね。取りあえず、本格的って変な言い方ですけど、ようやく取りあえず退院して新たな人生を始めたのがおいくつのときに。

(及川) 22 歳とか。17 歳から。

(田中) 17 歳から気が付けば 5 年間は入院生活だったんですね、出たり入ったりしていたけれども。

(及川) はい。

(田中) お母様がすごく看病をなさったと聞きました。

(及川) はい。

(田中) もちろん、お父様もお母様もいらっしゃって、お母様は大変すてきな方で。そのお母様が亡くなるというトランジションをその後にお迎えになりますよね。お母様のご病気になられた。

(及川) 僕がちょうど肺に 3 回目の転移をしたときに、母親も同じようにがんになったんです。お互い入院しているような状況で。治療の様子を聞けば、その治療がいいのか悪いのかとか、症状がどうなのかというのはもう 5 年も入院していれば分かるので、うちの母親は危ないなど。少し分かるというような状況でしたね。

(田中) お母様はどのがんでいらしたんですか。

(及川) 乳がんからリンパがんになって、どんどん転移しちゃって。

(田中) 何かそのときに、お母様がそのご病気を背負ってくださったんだみたいに思ったという。

(及川) そうですね。まずは、もう 3 回も転移していて、僕もちょっと瀬戸際だったので。まず救ってくれるお医者さんがいない。たまたまその人が、すごく名医ですごく情熱があって、こいつを何とかするみたいなことを、賭けでやってくれていた人なので。だから僕が 3 回転移しても付き添ってくれていて。もう治療もできないくらい肝臓も弱っているというような状況で、母親がそういうことに。

僕が最初に思ったのは、僕が死んだら母親も死ぬだろうということ。これが僕の 1 つのトランジションというか。医学的に何もできないけれども、気合と根性で男としてやらなきゃいけないことだ、というようなことを思ったんです。それで、僕が治ることが母を救う 1 つのことかなと思った。そのときの気持ちの強さというのは半端じゃない気がするの。そういうことがありました。

(田中) それこそご病気になった話だとか病気から復活をするという大きな、それこそ人生の中でのライフイベントな話ってあまり勉強会ではまだしたことがないんですが。ただ、そういうレベルじゃないのであえて申し上げますと、それこそオリンピックの直前の、おそらく最終選考会で、絶対こ

の瞬間でこれを勝ち取らないと、自分は死ぬぐらいな気で、本当に死ぬかどうかは別として、それぐらい大げさなことに考えている選手がいらっしやったりしたじゃないですか、現実には。

そのとき対処したその力は何だったかというお話を、よくいろいろな方々とすると、例えば私だったら、全然もう本当に及びもつかないようなことなただけ。でも、人って面白いなと思ったのは、最後の最後に、「あ、絶対この瞬間は頑張らなきゃすべてが終わる」と思ったときに、もうすごく身体的にぐうって、ぎゅってやっけて。自分はそのときプールの中にいたから、誰にも見えないから、プールの中でこうやって歯を食いしばる、って本当にあるんだと思ったんです。ゴーグルをやるから、泣いていてもばれないから、こうやって歯を食いしばって、ギリギリと歯ぎしりもして。そうやっていたのは今でも覚えているんです。

あんなこと今まではしたことなくて、ここ 20 年間は。何かそういう場面ってご自分で覚えていらっしやいますか、あ、あのときだなんて。例えば、ちょうど病院の屋上でこれをしていたときとか、そういう記憶ってありますか。方法記憶でもいいんですけど。

(及川) 僕、病院から毎日ちょっと飛び出して、外で 1 人で太陽の光を浴びながらぼっとする時間がすごく大好きで。そのときにいろいろなことを考えていたんですけども。そのときにいろいろなことを考えたのは、僕は今でもすごく覚えていますね。繰り返して、思いを繰り返して、思いを繰り返して。お前はどうかんだ、どうかんだ、これで頑張れるのか、もう 1 回やるのかみたいな。瞬間のことじゃなかったの。治療というのが、この段階の治療というのはもう本当に地獄のようなものだったんですね。それをやるということを決めるのには覚悟がいたりとか。

手術も僕は 20 回ぐらいやっているんですね。手術する方が簡単だったんですね、寝ていればいいから。それが今は点滴打たれて、髪の毛抜けちゃってみたい。もう 1 週間点滴でつなぎっぱなしとかというのはすごくつらかったですね。

そういうことに対して、やはり自分がしっかりやっけていかなきゃというのが、行ったり来たりしていた中で、やっぱり母親のことが一番強くて。自分が痛いとか苦しいとかそんなことはどうでもいい話で。ですから決めて。

あと僕はテレビをよく見ているんですね。競馬が大好きだったんですよ、競馬が。なぜ競馬が大好きだったかという、ウマって誰よりも速く走りたくて頑張るらしいんですよ。その頑張る様子がすごく大好きで、それにすごく影響されましたね。僕も頑張ろうと。あと、Mr.マリックがそれこそはやっていたんですけど、何か光の卵を自分の体でイメージして、それをうまく扱うことで病気が治るみたいなことを言っていて、やっていたんですね。

それをまねして、頭の中に光を思い浮かべて、丸い球体を思い浮かべて、それが目、鼻、口と行って肺に行って、肺がきれいになるシーンを思い描いていくということを、僕はずっとなぜかしていたんです。それは何でかななんですけど。CT 室に入る前に必ずそういうことを 1 つ。

(田中) 小さくなったりとかしたの？

(及川) 母親が死んだ次の検査で、いろいろあったんですけど、それが全部なくなっていたんです。

(田中) 今から『オーラの泉』です。

(及川) それはすごく不思議でしたけど。先生も、母親が持って行ってくれたんだねとか言ってくれましたけど。僕としては本当に不思議です。

(田中) この勉強会が変な方向に行っちゃって。

(重野) 僕も何かそういうの、ありますよ。

(田中) でも、絶対あるよね、絶対。

(及川) そういうことってあるらしいんです。

(重野) ありますよね、そういうシーンって。本なんかでよくそういうのを読むと、すごく治癒力が高まるということを感じることは、結構あるんじゃないでしょうか。

(田中) 今の方向の流れで 1 つだけ聞いていいですか。誰も信じてくれないんですけど、無心でパフォーマンスをするときをゾーンと言ったり、ピークパフォーマンスと言ったりするじゃないですか。しょせんそれって 1 回とか 2 回じゃないですか、何回もある人もいるのかもしれないけど。1 回だけ、本当に別に大したことない試合だったんだけど、でもそのときに私は死んだおじいちゃんがプールの中で私を持っていたんです。

皆さん、今から変な話です。逆さになってがっと一生懸命かくから手が疲れるので、手でたくさんかかないと足が高く上がらないから。高く上がらないと採点にはうまくいかないでの、一生懸命かいて重いわけです。そうしたら、前半部の曲あたりから誰かが、よいしょって持っていてくれて、ちらっと見たらおじいちゃんがいたんです。それで、あ、おじいちゃんだ。何でここにいるのかなと思って、ずっと軽くて。あれ——もう言いません。要はすごく頑張った話なんですけど。だから及川さんの話を信じるというね。

(及川) そうですね。そんなことがあったのがそういうときだったので、もう生きるか死ぬかだったので、何が起こってもしょうがない、何が起こっても。

(田中) 義足で、その後お元気にというか、もちろんまだまだいろいろ抱えていらっしゃるとおっしゃっていたけれども、病院をお出になります。初めて車いすバスケットを見たときとても、あんまり肯定的には見なかったと。バスケットじゃねえと思われたんだよね、最初は。

(及川) 一応バスケットマンだったので、プロを目指してやろうかみたいなのがあって。僕は日常生活では車いすにまず乗らないし、車いすの人といったら重度のかわいそうな感じの人みたいなイメージもあって。そんな人たちから「バスケットやらない？」なんて言われても、いや、やれないよ、みたいな感じだったんですけど。最初はそんなイメージをすごく持ちましたね。

(田中) きっかけは、何でお始めになったんです？

(及川) 僕がバスケットをやっていたことを、そのチームのキャプテンが知っていた。誰からか

連絡先を聞き出して、何度も何度も電話をかけてくるようになって。僕もたまたまちょっと時間があつたので、しょうがないか、ちょっと見てあげようかと思つたんですよ。そうしたら、まず仲間がいたということが大きかったですね。仲間というかすごくフレンドリーだったんですよ。僕、障害を持って、少しやっぱり劣等感を感じながらも、世の中には偏見があつて。その社会に出て行って、障害を隠しながら生きていく中で、やっぱり本当の仲間というのはいなかつたし。手助けしてくれる人たちはいたりとか、気を使っているやつはいたんですよけれども。でも、その場に行ったときにものすごく仲間の感じがあつたというか。

それが1つと、あとはやっぱりバスケットボールを持ったら、バスケットだというのをすごく感じだつたんですよ。車いすのイメージでしかなかつたのに。でも、ボールを扱うことが何しろ大好きで。

(田中) バスケットだものね。

(及川) バスケットだつたんですよ、車いすに乗つても。

(重野) 感覚がよみがえつた。

(及川) よみがえつたんですよ。まさか出会えると思わなかつたし。それは、もうバスケット、ボールをいじっていることが大好きだつたので、それがもう何しろよかつたです、感動できた。

(田中) 変な質問ですけど、今の及川さんを見ていると、それこそもう2000年にお目にかかつて以来、どんな及川さんを見るときも、そしてメールのやり取りをするときも、一度も感じないことなのであえて聞きたいんですけど。バスケットだと思われて、ということは、卑屈になつたことはあつたんですか。自分の人生に対して卑屈になつたり、周囲に対して不公平感を感じたりとかという、マイナスな方向に行って当たり前だと思つたんです。行かなかつたのかな？

(及川) ありましたね、卑屈。もともとすごく、例えば障害者を見たりとか、僕の子供のころは駅に行くとき物乞いをしている切斷の人がいたりとかして、そんなのを見るときもう1日中不愉快で、気持ち悪くなつちゃうような子供だつたので、自分がそういうふうになつただけでも、もう世の中からシャットダウンみたいな。劣等感のものすごくありましたね。だから、もう気を使って社会に入っていくんです。僕は足が悪いんですけどいいですかみたいな、そんな感じだつたんですよ。

一度、僕、ガソリンスタンドに勤めたことがあるんですよ、バイトで。二十歳ぐらいのとき、みんながアルバイトしていたような感じで僕もアルバイトをしたいと思つたら、痛々しい姿をお客さんに見せることはいけなからやめてくださいという言い方をされたんですけど。結構最初の壁ですよ、それってやっぱりねって。

(重野) ガソリンスタンドのアルバイトの時、その感情ですか、どんな思いがあつたんですか。

(及川) 僕、ガソリンスタンドに勤めた理由は、自分の車のガソリン代が安くなるかなと思つて。でも、そのためにショックの方が大きかつたかなと。

(及川) 痛いし痛々しそうって、そういう言われ方をしたのがたぶん初めてだつたので。確かに

痛々しいし、やっぱりお客様もちょっと気を使ってくれてやってないかなみたいなふうに僕は思ったというか。がっかりしたというのがありましたね。というか、がっかりしたんじゃないかなって、何か、ああ、そうなんだと。世の中はそうなんだみたいな。

(重野) それはまだバスケットに出会う前ですか。

(及川) 出会う前ですね。

(田中) 車いすバスケットに出会って。わりと、あ、面白い、バスケットだなと。でもその後に、突然ここからパラリンピックに出たいというのもすごいと思うんですけど。そこはどういうふうにか？本当にどんどん面白くなって、いつの間にかそうなったのか、逆に、よして長期ターゲットを持ったのか、それでいつの間にそうなったのか。

(及川) それは、僕が車いすバスケットを始めて 1 年ちょっとぐらいして母が亡くなったんですけども。母が亡くなる時、昏睡状態に入った後が長くて、2 カ月ぐらいあったのかな。看病しているときに、何か言ってみようかと思いました。

(田中) 何か言った？

(及川) 何かを母親に言ったら、叶っちゃったりするのかな、みたいなことをちょっとふと思って、2 つ約束をしようという話をしたんです。母親はもう全然答えることはできなかつたんですけど、約束をする。1 つは、父親は大切にすることから、大丈夫だから、俺が責任を持って大切にすること。そうやって言っておかないと母親は心配するだろうというので、1 つはそれを。そして、その時は車いすバスケットが大好きだったので、パラリンピックに行くよということ言ってみようかなと。

全然現実的じゃなかつたんですけど、取りあえずパラリンピックに行くよと言ったら、手を握り返したんですよ。普通なかつたんですけど、普通まったく動かなかつたんですけど、そのときだけ、ああ、手、握っちゃうかなと、僕の中で。そのときは僕 1 年目ぐらいで車いすの動かし方とか全然だめで……。

(田中) そうか、車いすの動かし方というのがあるのか、バスケット以外に。

(及川) そうなんです。だからそこで決めましたね、パラリンピック。もうこれ、行くしかないなという。全然どういふ世界かも知らないし。でも車いすバスケットで一番を目指すなら、やっぱり世界でのトップだから、パラリンピックに行く、と。そう言ったら握り返してきたので、ああ、これはもう取りあえず目指さなきゃなと。そこが出発点だったんです。

(田中) 車いすのバスケットのチームって、どんな練習をするんですか。1 日の典型的な練習って。

(及川) 走りますね。自分たちのレベルでがんがんに走ります。

(田中) 腕力ですね、それは。

(及川) 腕力ですね。あと、走っている車いすをがっつと止めないといけないのですが、ブレーキがないから手で止めなきゃいけない。なのでまずはもう止まって走っての繰り返し。だから、車いすの操作がうまくて力が強ければまずはもう加点されていくんです、ある程度のレベルまでは。技術とかの問題じゃない、車の操作が60%ぐらい。

(田中) 車いすもかっこいいんだよ。形が普通じゃない。

(重野) 全然イメージが違ったよね。

(田中) あれ、転びやすいの？

(及川) くるくるくる回っているものなので、動作性がよくなっている。

(田中) 手、かなりじゃないと、あれ、届かないでしょう、シュート。

(及川) そうですね。でも、人間ってすべてにアジャストできるというか、そんな気がするんですね。みんな言うんですけど、そこに飛ばすもんだと思っていれば、そのうち届くようになる。

(田中) すみません、今の言葉は書きとめていただき、子供たちにお伝えいただければと思います。届くように……

(重野) いかにノーをつくっているかということですね。問題は。

(田中) しかも、チームの団体名はノーエクスキューズという、まあ、暑苦しい名前です。ノーエクスキューズだよ、だからポテンシャルなんて別に永遠にあるし。

(及川) そうですね。

(田中) 言い訳するなど。ただ、ノーエクスキューズのチームを結成する前にももちろんシドニーパラリンピック)というものがあります。シドニーでのご経験でよかったこと、残念だったことを教えてください。

(及川) シドニーの経験でよかったことと残念だったこと。

(田中) 残念というか、よくないか。

(及川) よかったことは、こういうことを言うときちょっと語弊があるかもしれないんですけど、4,000人ぐらいの障害者が選手村、パラリンピックもオリンピックと選手村は一緒なんですけど、そこに

一堂に会するわけですね。だいたい2週間ぐらいずっと一緒。そこで1つのコミュニティーが出来上がるんですけど、それはもうすごいです。しよせん僕らはマイナー、マイノリティーじゃないですか、世の中では。でも、みんな障害者なんですよ。みんな足がない、手がないとか知的障害者だ、耳が聞こえない、目が見えないとか。何だこいつ、みたいなことだったりとか、お前もかみたいなことだったりとか、それでまたインターナショナルで。だからそこには劣等感はないです。みんなそうだから。それはもう本当、すごいなと思いましたね。

(田中) すごい経験ですね。

(及川) すごかったです。スタッフで入っている健常者の人たちがマイノリティーなわけですよ。

—中略—

(田中) シドニーではどんな結果だったんですしたっけ？

(及川) シドニーは9位です。

(田中) すごいですね。

(及川) いや、12チーム9位だから…。予選はもちろん勝ち抜きなんですけど。

(田中) いったんそこで引退しようとか思われました？ それとも、もう1回アテネとか。シドニーが終わったときに、もうアテネのことを思われましたか。

(及川) シドニーが一番最初のパラリンピックだったんですね。だからすべてが新しかったし、僕も試合を経験として、試合で戦ったというよりかは、ちょっと出してもらったみたいな感じで、バスケットに関してはすごく消化不良だった。

(田中) 結局、もちろん国内ではシドニーの後もいろいろなチームでおやりになりますけど、アテネには行けなかったんですよ。

(及川) そうですよ。

(田中) パラリンピックに選んでもらえなかった。どう思われましたか。

(及川) 僕自身のことで、自分のその調整の仕方が悪かったというのもある。結構、アテネを目指して、アテネでピークに持っていけるように自分で考えていたんですけども、それが実はその前に選考をするじゃないですか。例えば、9月にピークを持っていこうとしていたんだけど、選ぶのは4月だったり3月だったり。そのある程度結果を出していかないとだめだということで、微妙な争いだったんです、アテネは。しかも僕は一番絶好調だったんですよ。合宿も補欠で入ってい

たので。でも、それがきっかけになったのでしょう。

(田中) 及川さんのバスケット選手としての長所は何ですか。何が強みですか。

(及川) 僕ですか。思い切りです(笑)。

(田中) 思い切りそうだよ(笑)。

(及川) 思い切り。僕、いつも5分、3分でももう喜んでプレーする。3分で流れを変えたりするのが、大好きというか得意です。

(田中) 今、目が変わったよね。ここのゲストの方って絶対、自分の競技の話をするときの目だけ変わりますよね。

(重野) 突然、入り込んでやう。

(田中) 入り込みますね。

(及川) 出ちやいますね。

(田中) でもね、私、前におかしいなと思ったのは、お母様におっしゃっていたのはパラリンピックに出たいな、だったじゃないですか。実現したじゃないですか、シドニーで。達成したのかなと思ったんですけど、そうじゃなかったんですか。

(及川) 忘れていたというか。でも、モチベーションとしてはもう選ばれることが当然と思ってやってきたし、シドニーに行ったときにあまりにもふがいがなかったの、そこからまた始まったみたいな。

(田中) 何がふがいがなかったの？

(及川) 自分自身のプレーのスキルだったりとか、心の持ち方だったりとか、あとは準備だったりとか、車いすバスケット全体にいわれるストレスだったりとか、チームのつくり方だったり、いろいろな部分にふがいなさを感じて、全然力が発揮できなかった。全然ですね。新聞には、『読売新聞』か何かで55秒の奇跡みたいな、55秒しか出ていなかったのが取りあげられたりとかして、変だな、みたいな。そんな輝かしくないじゃないですか、僕にとっては。55秒しかなくて、最後の最後で楽しんでやってこいなんて言われて。もうふざけるなと思ったことが新聞でも取り上げられるとかしていると、もう何だよ、と。

その人が俺を書いたのは、母親に誓ってシドニーに行って達成しましたよと、55秒だけれども奇跡がおきた、ということを書いたかったから。でも僕から見ると、どうでもいいんです。

(田中) どうでもいい。36歳なのに、さっきおっしゃっていたけどあえて言いますね、これ。36歳

なのに北京を目指すよ。

(及川) そうですね。

(田中) 大きなことをおっしゃっていた。本気？

(及川) 本気で目指そうかと。

(田中) 36歳という年齢の、よい点と悪い点と教えてください。現役選手としての。

(及川) 肉体的なピークはもう過ぎたと思っていて。ただ、経験だったり考え方だったり、そういうものが成熟してきたというか。いつまでたってもうまくならない選手は嫌なんだと。いつまでたっても満足できないというか、そろそろ今までのことを出してもいいかなと。ある程度形をつくっておかないと作品にもならないし、いつまでたってもまだ僕はまだまだですというの、じゃあ、いつなんだよみたいな。もちろん自分の中でいつも課題があってあれなんですけど、そろそろ自分としての集大成を何か残したいなというのがあるんです。

心も体も充実した瞬間というのが、少し多めにやってくるような年になったんですね。北京のパラリンピックへの出場は、来年じゃないし、シドニーじゃない、北京の後のイギリスでもないし、と思うと、ここかな、ということで決めました。

—中略—

(田中) そうだ、アメリカの大学に行かれたんですね。

(及川) そうです。アメリカに行って、劣等感はいろいろあった中でアメリカに行って、もし英語がしゃべれるようになって帰ってきたら格好いいなと思うし、自分にも自信が持てるんじゃないかと。その間頑張っていけば、病気にも追い付かれないんじゃないかと思ったりとかして。とにかく1年区切りで去年の俺よりいいな、と思うことをすごくしていましたので、新しいことがあるとすぐ飛びついて、よしこれでいこう、というのはありました。

何でもよかったんです、変わっていくことが。

—中略—

(田中) 一番の変化かどうか及川さんにしか分からないんだけど、ご結婚なさるじゃないですか。

(及川) はい。

(田中) そのときにいろいろお考えになるじゃないですか、本当に結婚していいのだろうか。結

婚しても奥さんを1人にしちゃうんじゃないとか、いろいろすぐお考えになるわけで。変化ですよね。

(及川) そうです。

(田中) すごく大きな変化じゃないですか。それはどういうご決断をなさったんですか。今のお話プラス、なぜご結婚なさったのか。

(及川) 結婚。何でかな。

(田中) それはいつでしたっけ? 何年。

(及川) 2年前ですね。僕が結婚した理由は、僕のこういう生き方を、屁のような言い方をする人だからですね、僕の妻が。だから何なの、みたいな。今の僕しか見ていないというか。いろいろ大変なこともあったんだよ、他の人には分からないんだよとか言っても、「だから何?」みたいなことを言うような人だったんです。今でもそうなんですけど。それがすごくよかったというか、新鮮というか。でも、自分の一番大切にしている価値観を分かってくれていて、僕の背中を押してくれるような人なんです。正しい位置に。結構。

僕、今、社会のこととか世の中のことをあんまりしていなくて、自分のことばかり考えてバスケットをやっていたから、そういう意味ではすごく今、彼女に背中を押してもらっているときというか。そういう人で、唯一価値観と言うんですかね、僕は本当はこう思っても、あなたはここはこういうふうに言いたいんじゃないのとか言ってくれたりとか、僕は本当の意味でこういうふうにした方がいいということを告げてくれる唯一の人だったから、結婚してもいいかなと思って(笑)。

(田中) すてきですよ。本当に愛していなかったら言えないからね、こういうとき。

—中略—

(田中) いくつかちょっと質問させてください。いつ再発するか分からないとまだ思っているとおっしゃっていましたよね。もちろん再発しようがしまいが、私たちはいつ死ぬか分からないということは、別に誰であろうと一緒にわけで、という話を前に及川さんにさせていただいたと思うんですけども。でも、ちょっと聞いてみたいと思うのは、将来ってどんなイメージなんですか。将来って、逆に持っていらっしゃるのか、逆に持っていらっしゃらないのか。将来のイメージって。

(及川) 将来のイメージはないですね。全然ないですね。ないですね。

(田中) ないですよ。話すときに将来のイメージがあるお話をしないですね。

(及川) しないですね。

(田中) すごく今、くさい言い方をすれば今を大切になさっているよね。

(及川) 今、大切にしています。そうなっちゃっています。

(田中) なっちゃっている。そう……

(重野) 1つ感じていたんです、最初から。

(田中) もっとこうこうこうなるというような話よりは、違いますよね。

(重野) それってどこから来ているのかな。毎日毎日まったく新しいキャンパスを用意して、またその日、と。そこにどわっと一通り絵を描くと、また捨てて、次の新しいキャンパスに向かう。

(田中) 捨てるのも上手だよね。

(重野) すごく捨てるのが上手だなと、僕、思います。

(田中) 捨てているよね。

(及川) 本当ですか。

(田中) 捨てなきゃこれだけに新しいことにタッチしていないだろうなと思う。

(重野) すごく出し入れが上手、本当に。

(田中) うまく捨てろという話は、それこそ引退する選手なんかによく申し上げるし、自分の中では捨てなきゃ捨てなきゃといつも思っているし。それを、捨てなきゃと執着するということは、結局捨てていないわけであって。でもそれを、あ、俺って捨てていますとか言う人ほど、やっぱり捨てているじゃないですか。捨てているという意識がないでしょう？

(及川) ないですね。

(田中) その人たちってぽろぽろぽろ落ちていくせに、捨てていますよと言っても、僕、捨てていないですと言いながら捨てている感じじゃない、何かね。それがすごく普通ですよ。

(重野) すごく自然ですね。

(及川) ああ。

(田中) ああ、じゃないよ、褒めているの、私は。それともう1つ、転機がたくさんあったじゃないですか、もう本当にたくさんあった。それぞれの転機、もちろんいろいろ違いがあるかもしれないけど

れど、今、振り返ってみて、その転機をくぐり抜けた自分を振り返ってみて、たぶん精神的なものになると思うんですけど、何か自分の力として得たものと、でも、この精神的なスキルは失ったんだよねというのと、もし両方あったら、どれかの転機だけでもいいし、全部でもいいし。分からないけど。

(及川) アメリカに行ったときは、それまでのことは全部チャンスだと思って。それがすごくうまくいって。僕、車いすバスケットでパラリンピックに行くとは言いながら、母親に誓っておきながら、留学するときには車いすを持っていないんです。車いすバスケのチームがそこにあるかどうかも知らなかったんです。

でも英会話学校に相談したらそこしかないと言うから、しょうがないなと。それで行ったんです。それで、ホストファミリーのお父さんがイエローページが何かを探していたときに、車いすバスケットのチームを見つけたからお前電話してみろ、みたいなことになって、電話をして。そうしたら練習に来いということになって、車いすを日本から送ってもらってやり始めて。でもそのチームじゃ全然納得しなくて。それでアメリカの全米選手権を見に行ったとき、そこで優勝したチームのキャプテンに何回か声を掛けて、僕もちょっと練習させてくれと言ったら、カリフォルニアで、となって。ワシントン州に、シアトルにいたんですけど、カリフォルニアまで旅をして、そこに着いたら練習をして、みたいな。何か言ってやって、言ってやってというのがすごくうまく進んで。いい人に出会えたというか。そこで、「あ、チャンスは全部自分のチャンスになる」と思ったんです。

(田中) どんな転機もチャンスですね。

(及川) 全部チャンスとと思いましたね。何か自分に降りかかってくることは、チャンスなんだと。何かいい方向に行くことを考えて、全部拾ってやろうというぐらいの勢いでした。

(田中) 後悔していることはありますか。今までのチョイスでもいいし、何でもいいんですけど。

(及川) ないですね。後悔。

(田中) 書きちゃおう。

(及川) 後悔しているのはないですね。

(重野) 想定質問のように聞いたのにね。

(田中) 一応聞かなきゃなと思って。では、及川さんの人生にとっての幸せは何ですか。

(及川) 僕の幸せですか。何かそれを考えようと思うと、俺、いつも、今いることで、こうやっているだけで幸せだって思うんですけど。まさに、今でも結構覚えているのが、病気をして入院しているときに、もしも普通の世界で普通のことのできたら何て幸せなんだろう、ということをしごく思っていた、ということなんです。だから、今、こうやっていることで満足。どうしたら幸せって考えると、もうこうやって話しているだけで幸せ者だし、という感じ。これ以上のものを望んだら……。そういう

ふうになっちゃいます。

(田中) でも、今のこの言葉というのが、どんなにこれが究極かということが、たまに学生にいろいろ話をしたりするときに、すごく間違っ取られてしまうんです。つまり、別に向上しなくていいのだと勘違いする人がいるんです。今のままでいいやというのは、今のままでいいということは、なまけろと言っているのでもないし、向上しなくていいと言っているのでもないという。ここ、すごく微妙ですよ。

(及川) はい。

(田中) そうじゃないよね。

(及川) そういうことじゃないですね。ベースが幸せなんです。そこから、その先のことって、さっきも言ったけど分からないんです。将来のことを考えなくて。

これまで僕は自分のことばかりやってきたけれど、だけれども、最近何か世の中のためにできないかなというのを常に探しているような状況ですね。すごい病気をして何とか頑張っここまで来られたということとか、すごくお世話になった人のこととか。そういうことで何かできないかな、と。ただ、今、僕と同じような病気で苦しんでいる子供だったり親だったりすると、それはやってあげたいとかじゃなくて、何か自分の使命みたいなものがあるんじゃないのかな、と。何かそんな感じですよ。

(田中) 重野さん、最後に何か。

(重野) 以前の及川さんと今の及川さんでは、だいぶ変わってきていらっやるんですか。

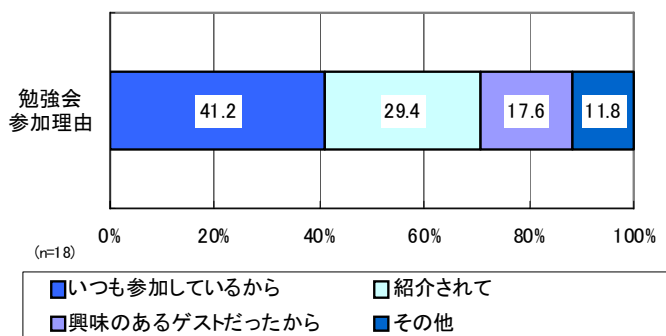
(及川) 変わってきていますね。足を切断したりとか病気になっちゃうのはしょうがないじゃないですか。でも、僕はそういうふうになっても、お先真っ暗じゃないし、僕は障害者になってみて、よかったんだ、と。もし2つのルートがあるならどっちを取るかとなったら、僕は病気になった方を取るなというぐらいなんですけれども。だけど、そういうことを何か伝えたいというか、そういうことが分かったら、たぶん結構思い切っいけるんじゃないかな、と思います。

以上

2. 第23回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果

アンケート総数:18

1. 勉強会参加理由



2. 今回の勉強会で感じたことは何ですか？

- 人間はどんな状況でもアジャストできること。
- 及川さんのこれまでの生き方から「今」にフォーカスしている様子(別に肩に力が入っている訳ではなく)、又すべてがチャンスだと心底思われていた時の話など、死を強烈に意識された方の人生観を見たような気がしました。あとホントに等身大でやってこられたんだなあと思いました。
- 障害をお持ちの方へ接客することが多いのですが、普段なかなかお話を伺う機会がないのでとても貴重な時間でした。目に見える障害でなくても誰もが心の中に劣等感を抱いています。今日のお話を聞いて、とりあえず私の劣等感なんてほんとに小さいと思いました。深いお話をありがとうございました。
- 奇跡的体験をトランジションでされていて、しかもポジティブに考えられているところがポジティブな行動を生んでいるんですね。未来への自分へのメッセージを何としてもお聞きしたかったですね。
- スポーツが健全な社会づくりに寄与していること。人にはそれぞれその人にしか出来ない役割があること。素晴らしい話を聞かせていただきました。
- 「自分が走り続けれる事が他の人を引っ張っている。その為にも頑張っている。」という事に刺激を受けました。
- 時間を作りこのような勉強会に参加することで自分の幅を広げていくことの大切さを感じた。参加させていただいて有難うございました。
- 単純に及川さんはアスリートであり、不自由もなく人生を楽しんでいることに興味を惹かれました。障害を持っていることはマイナスではなく、そうゆう考え方すら不自然さを感じられました。
- 初めて参加させて頂きました。「キャリア・トランジション」とは何か？が今回のテーマでした。会を終えて感じたことは、トランジションはいつ施されるか分からないけれど、いつも何かを感じていることが結果としてトランジションであるということ。だから及川さんが今を生きることが幸せであり大切にしていることには納得できました。
- 及川さんの穏やかな語りの中にあつい想いや、楽しそうな語りを引き出す京さん、重野さんのスタンスが素敵でした。及川さん初めアスリートの方々のご経験、「知」を次世代に伝えていくことにお力添えしたい。「将来のイメージを持たれないこと」についてもっと聞きたいです。
- すみません。まだ整理ができていません。
- 周囲の環境やサポートが大切だけど最終的には本人の気質なのかなと思いました。それと京さんのおじいちゃんの話はアリだと思えます。
- 過去に TV のドキュメント番組で及川氏を知った時、涙が止まらなかった。今回のお話を聞いてすごく自然体に自分を大切に自分の居場所を確保して生きていこうとやることを実感しました。感動というよりも、淡々と語られている姿に遠くの方ゆえの日々を大切に転身続ける特有の人生観に静かな強さを感じました。今日は及川氏のお話が楽しく自分の中に響いてきました。
- 逆境をどの様にチャンスに変えるかという気持ちのもっていきよう。元スポーツ選手として何が出来るかという事を明確にしたいと思う。
- 及川さんの今を 100%生きている姿にとっても勇気をもらいました。足を切断という、アスリートにとってもっとも過酷なトランジションを、現在おだやかな表情で話す及川さんの強さは本当にすごい。きっと同じ境遇の方々に大きな影響を与えられると思います。北京五輪頑張ってください！
- 「病気になるって良かった」と考えられる、メンタルの強さにさせられました。

- ・ 昨日より今日がいい→自分を日々成長させていくことが大切だと感じました。今障害者ローイング(ボート)のコートをしています。選手と共に北京を目指し、成長していきたいと思います。
- ・ 現在、理学療法士の勉強をしていて障害を持っている方に話を伺う機会があって、その人も病気になって幸せだと言っていた。及川さんも同じ事をおっしゃっていて大変驚いたのだが、すごく生き生きとお話されていたのが印象的でした。

3. 今回の勉強会でのまとめを、何かキーワードとしてあらわすとしたら？

- ・ あきらめないこと。変わり続けること。自分の置かれた状況を俯瞰してみること。
- ・ 「今を生きる」ですかね。
- ・ 「手のひらの中にある可能性」。チャンスをつかみ続けてきた及川さんの手が今では力強く車椅子の車輪を押し、止めてまた進んでいく。手のひらの中にある素晴らしい力を私は知らなかったのですが、これから迷った時には「私にもそんな可能性があるかも」という事、覚えておこうと思いました。
- ・ 昨日より今日！今日より明日！今を最高で生きよう！！
- ・ 自然体 役割 使命
- ・ “自分自身の受容”が原点。
- ・ 「仲間」「家族(妻)」「感謝の気持ち」
- ・ 「チャンス」「後悔はない」「幸せ」→今を生きている。
- ・ 新しい「部分・出来事・出会い」に自分の色を塗ること。
- ・ 今を生きる。還る場所。
- ・ ふりかかってくることはすべてチャンス。ひろってやろう。
- ・ 全ての転機はチャンス。
- ・ 「自己受容による歩み方」
- ・ 「人生は全てにおいてアジャスト出来る」
- ・ 逆境を自分のパワーにする。
- ・ 「逆境を楽しむ」
- ・ 「日々成長」「今が大切」
- ・ やればできる！

4. 今後の勉強会にて取り上げたいこと

- ・ アスリートの妻とか夫とか本人ではなくパートナーから見た話も聞いてみたいです。(及川さんの話を聞いてそう思いました)
- ・ 基本的には現在の路線で不満はないです。アスリートの方は種目こそ違えある面、勝負の世界で生きておられると思うのですが、その結果(勝ち負け)を求めるところとプロセス(練習、トレーニング、試合時のコンディション等)についてどのようなお考えを持っているのか関心があります。またメンタル面での取り組み方法(ストレス解消等)にも一流選手独特のものがあるのではないかと考えています。
- ・ 幅広くスポーツにおけるキャリア・トランジションを様々な視点から考えられる勉強会なので、一般企業のカウンセリング担当や人事の方とかもゲストに呼んでもらっての京さんとのトークも聞いてみたいです。
- ・ スポーツを教える側がどの様なトランジション意識を持っているか？
- ・ アスリートの方であれば誰でも。
- ・ アスリートでなくなった及川さんを、数年後(北京五輪後)呼んでほしいです。
- ・ コミットがテーマであることが非常に興味深いです。コミットを掘り下げてほしいです。
- ・ スポーツをやっている(きた)からこそ、カ・メソッドとキャリア・トランジションについて。(一般論で語られるより深く)
- ・ 陸上選手のトランジション。種目によっては大学を卒業してしまうと続けられないので。
- ・ スポーツ政策を打ち出す方から見たアスリートのキャリア・トランジション。
- ・ アスリートのセカンドキャリアについて何が本人にとって一番幸せなのか知りたい。
- ・ 学生アスリートが自分のキャリアをどう見ているか。
- ・ 刺激となるようなものであれば何でも結構です。何か感じられればよいと思います。
- ・ すみません。思いつきません。ただ会場の人でディスカッションができればいいと思いました。

5. 2007年6月21日勉強会参加者 計19名

次回勉強会スケジュール

第24回勉強会

2007年10月4日(木)18:30~20:00

ゲスト

中込 四郎(なかごみ しろう)氏

筑波大学体育科学系教授

テーマ

「アスリートのキャリア・トランジション」

場所

ミズノエスポーツ

事務局:株式会社MJコンテス

東京都港区白金台 4-5-7-205

TEL 03-3447-2890 FAX 03-3447-2893

田中ウルヴェ京

ご意見・ご質問などございましたら事務局までお問い合わせください。